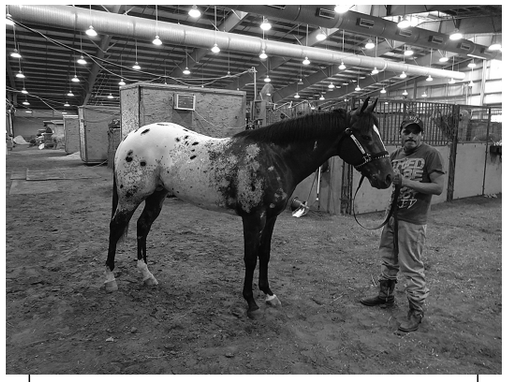
世界旅打ち気分

●第28回・フェアメドウズとシスルダウン

須田鷹雄

写真のカラー版は
https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/の
#グリーンファーム会報#2020年10月号
でご覧いただけます



厩舎で撮影させてもらったアパルーサ

まだスタンド背面がレンガ造りだったころのシスルダウン

フェアメドウズ競馬場のレース風景

https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/

筆者は海外の競馬場をのべ150場ほど訪れているが、国別でいうとオーストラリアが最も多く、次がアメリカになる。この2つの国はそもそも競馬場の数が多いし、さらにグリーンチャンネルの長期ロケで訪れているため、自然と場数が稼げている。

今回はグリーンチャンネルの「アメリカ横断6000キロ」で訪問した競馬場をご紹介しよう。まずひとつめは、フェアメドウズ競馬場である。

フェアメドウズ競馬場があるのは、オクラホマ州タルサという土地。オクラホマシティからは東へ車で2時間ほどのところだ。オクラホマといえば元阪神タイガースのランディ・バースが有名。競馬場の人に「バース知ってる?」と聞いたところ、「知ってるよ! 野球引退したあと、州の議員やってるからね」とのことで、向こうでも知名度は高かった。

ただタルサの街そのものには良い印象が無いというか、泊まった場所がアメリカ横断全体の中でも1,2を争う怖さだった。エリアにもよるのだろうが泊まったモーテル近くの雑貨店は店員がケージの中に籠っていてフレンドリーな会話など皆無だし、棚には商品が1品目につきひとつずつしか置かれていない。盗まれることありきの陳列なのだろう。

そんなタルサにあるフェアメドウズ競馬場をわざわざ撮影の対象にしたのには理由がある。アパルーサやペイントホースのレースがあるからだ。

アパルーサは体に斑点があるのが特徴の品種で、調べてみるとアメリカではオクラホマ州よりもアイダホ州に愛好家が多いようだ(ちなみにアイダホ州はミュール=ラバのクローンが作られた州でもあり、サラ以外の軽種馬がなにかと人気のようである)。

ペイントホースも品種のひとつで、こちらは体を塗り分けたような毛色が特徴。アパルーサともども用途としては乗用がメインだが、ほんの少しだけ競馬もあるのだ。

ただ、なにぶん競走馬登録されているアパルーサやペイントホースは絶対数が少ない。よってコンディションブック(番組表)にレースが予定されていても、頭数が揃わず不成立になることがある。我々が ロケに行った日のちょうど1年前の同一開催日はペイントホースのレースがキャンセルになっていたので、ロケにあたっては主催者に「レースある?不成立にならない?」と確認していた。先方も「大丈夫、あるから」と自信を見せていたのだが……行ってみたら案の定不成立だった。

それではテレビにならないので、頼み込んで厩舎にいるアパルーサとペイントホースを見せてもらうことに。こちらも「クォーターホースと配合しすぎて、斑点のあるアパルーサが少ない」などの問題に直面したが、最後はなんとか画になる馬を連れてきてもらってなんとか ロケを終えることができた。

ちなみにこのフェアメドウズ競馬場、他の競馬場にはない特徴がひとつある。勝負服が馬主服ではなく、さりとて地方競馬や韓国のように騎手服なわけでもなく、単純に馬番で決まっているのだ。アメリカは1番が赤、2番が白、3番が青、4番が黄……とゼッケンの色が決まっているが、ここは勝負服もその色に統一されている。分かりやすいといえばわかりやすい。

アパルーサやペイントホースのレースは一度見たいが、競馬場もシンプルな作りで特徴は無いのでわざわざもう一度行くのも……と思っていたのだが、調べてみて驚いた。いつの間にか競馬場が改装され、公園風のきれいな競馬場に模様替えしているようだ。6~7月の金・土・日がクォーターホース・アパルーサ・ペイントホースの開催日のようなので、これはコロナウィルスがひと段落したら検討しないわけにはいかない。

もうひとつご紹介する競馬場は、シスルダウンズ競馬場。オハイオ州北部にある競馬場で、最寄りの大都市・クリーブランドからは車で30分ほどというところだ。

当時番組をご覧になった方の中には、「そんな競馬場出てきたっけ?」とお思いの方もいらっしゃるだろう。実は番組には登場していないのである。

ロケはおよそ3週間、撮っては移動の押せ押せスケジュールだったのだが、その中に2箇所だけ宿泊地への移動後に行こうと思えば行ける開催場(撮影とは関係なし)があった。それがこのシスルダウンズともうひとつ、こちらはハーネスの競馬場であるサイオトダウンズという競馬場だった。

競馬場ロケで疲れ果てているのに空き時間に競馬場に行くというのは我ながら正気の沙汰ではないが、見に行ける開催場があるのに行かないというのもまた、罪悪感があるものなのだ。

このシスルダウンズはオハイオダービーの行われる競馬場。しかし競馬場の経営は楽なものではなく、オハイオダービーの立場も二転三転してきた。

もともとはG2格のレースだったのだが2010年からはG3となり、さらに14~16年にはグレードを失ってリステッドレースとなっていた。その間、09年にはオハイオダービーに大きな賞金を割くよりは広く薄く支給したほうがよいという議論も出ていったん中止になりかけたほどだ。ただ最終的にはその年の秋に開催が決定され、G3として実施された。

我々が訪れたころ、場内の展示コーナーにはオハイオダービー華やかなりし頃のプログラムが展示されており、毎年表紙はミスオハイオ州が飾っていたようだった。いかにも80年代の公営競技全盛期という感じのプログラムだったが、そこから30年ほどでいったんグレードを失うに至ったというのは寂しい限りである。

しかしそんなオハイオダービーも2017年にはG3格を取り戻し、現在は賞金総額50万ドルのレースとして立派に実施されている。

それが可能になった背景には、併設されたカジノの好調がある。

我々が訪れた頃のシスルダウンズは全面がガラス張り、スタンド後部がレンガ造りという変わった建物だったのだが、いまグーグルマップで見るとスタンドの背面側、つまりカジノの入っている側が大きく拡張され、ベージュ色のコンクリート作り、かつかなりの台数が止められそうな立体駐車場が設置されている。

カジノはシーザーズ社とロックゲーミング社の合弁で運営されており、2016年には施設そのものの名前も「JACK」に改められた。小さく「シスルダウン」も併記されているが、完全にカジノが主、競馬は脇役という感じだ。

オハイオ州は州最古の競馬場だったビューラーパークが、カジノを併設できなかったために廃止になっている。それと比べると、カジノ設置のための前提条件に過ぎなかったとしても、競馬を続けられることは幸運なのだろう。